
優男、所により魔王

斥侯部隊 隊員

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優男、所により魔王

【Nコード】

N9297X

【作者名】

斥侯部隊 隊員

【あらすじ】

魔王は強大な力を持っていた。だが強過ぎる力故に彼は孤独だった。常々この理不尽に哀しみを感じていた魔王は、哀しみを怒りに転換させ破壊の限りを尽くし、生命が根絶すると魔王は転生して虚無感から逃避する。そんなことを繰り返していると、ついに魔王は神の私怨を買ってしまい、極小魔力、記憶抹消のペナルティを受けて転生。無事に転生できた方がいいが、彼の顔と性格は、転生前とは似ても似つかぬ優男になっていた……！！

「魔王、転生」

彼は、魔王と恐れられる存在だった。

魔王である彼は、強大な力を有していた。

彼は、強大な力を持つ故に孤独だった。仕えていた臣下には悉く裏切られ、牙を剥かれる。その度に彼は、刃向かう者を己が牙で叩き潰した。

いつしか、彼の周りにヒト（もしくはそれに準ずるモノ）はいなくなつた。

彼は嘆いた。

ひたすら嘆くと、哀しみは怒りへと転換された。

——我だけが哀しむのも、不公平であろう？

彼は、魔王は体の奥底から湧き上がる破壊衝動に身を任せた。

その結果、地上では魔王を除いた全ての生物が消滅した。

やがてやってくる空虚な喪失感。

——結果はいつもこれだ。いくら破壊しようとも後に残るのはこの虚無感のみ。もう、疲れてしまうたわ。

そして魔王は繰り返す。

『《転生》リインカーネーション』

愚かな逃避行動を。

オオオオオオオオオオ——

魔王を中心に魔力の渦が広がる。渦は荒れ果てた土を更に削り、
疲弊した大地に追い討ちをかける。

オオオオオオオオオオ——

しかし、どこまでも広がるかと思われた魔力の渦は突如に霧散
する。

そして、魔王もまた姿を消した。最後に立っていた場所に一輪
の紅い花を残して。

気が付くと、魔王は素っ裸になっていた。

衣服を探そうとするも、今いる所が見覚えのある空間であった
ために諦めた。

「何してくれとんじゃボケエ!!」

「がふうっ!!」

頭部に物凄い衝撃。魔王でなければショック死しているほど。

何もない、白い空間が広がっているこの世界。どこからともなく、とんでもない衝撃が魔王の頭部を襲った。

滅多に負うことのなかった懐かしい痛みである。

まだ痛む後頭部に手を当て、若干涙目になりつつ顔を上げると、

「ふんっ」

幼女が、尊大な態度でふんぞりかえっていた。

「久しいな。神よ」

魔王は無感動な声色で再会を懐かしんだ。

「久しいな、じゃないよ！！全く、今回は900万種の生物が全滅だ。こいつらはお前さんの破壊欲求を満たすために生まれたワケじゃないんだよ？しかもまた性懲りもなく転生しやがって。もう我慢ならん。転生しちまった以上、またどっかに生まれさすけど、ペナルティつけるからな」

幼女に凄まれた魔王は疲れた顔になった。

「ついカツとなってな。自制が効かなかったのだ。ああ、もういい。早く別の世界へ飛ばしてくれ。ペナルティとやらはどうでもいい。どうせなら魔法がない世界がいい」

「何言ってんだお前。今更テメエの願望が通ると思ってるのか？
そうだとしたら、おめでてえ頭だな」

外見と口から飛び出してくる言葉のギャップに、思わず魔王は
たじたじとなる。

「いや、巨大な魔力を持つ我がいれば確実にその世は壊れるであ
ろう？ ならば……」

「あいな」と、一転論すような口調で「お前が生物を全滅させた
のも、こうしてお前が転生するのもみんな私達から見れば自然現象
なの。逆に自然ではない出来事は存在しないよ。いくら人が汚して、
汚染させきった大気だって、私達からすればそうなることは必然。
言うなれば、運命さ」

ならばさっきの剣幕はなんだ、と問い詰めたところだが、大
方「仕事増やすなド低能が」という私怨からだろうと、納得する。

「それで、次の世界はどこなのだ」

魔王は問うた。

「『リヴァアース』—— お前が今まで暴れていた世界とあん
まり変わらない。ただ、長寿の薬なんてないがね。それとペナルテ
ィの話だけど、魔力を今の3億7962万6541分の1にして、
記憶を抹消する。勿論、人格も変わる。長生き——人間の寿命程度
まで——は出来ると思うよ。筋力や魔力は自分で鍛えな。ただ、戦
闘技術だけは残しておいてやるよ。純粋な剣術だけな」

魔王は深く頷いた。これまでとあまり変わらない条件だが、記憶を消されるのは初めてである。しかも70年ほどしか生きられないとなると、自分が魔王になる可能性は極めて低い。魔王は大いに満足した。

「じゃあそろそろ飛ばすよ。準備はいいかい」

「万端だ」

全て言い終わらない内に、魔王の姿はその場から掻き消えた。

「精々楽しみなよ。束の間の休息をね——」

〈元魔王、探索〉

木刀に、僅かな魔力を流す。魔力が浸透して薄紫に発光する木刀は、僅かに切れ味が増したようだった。

「ちいっ」

魔力を流す間にも、緑の半固体状の生物『スライム』は容赦なく飛び掛かってくる。スライムにくっつかれたら、引き剥がさない限り特殊な粘液でじわじわと分解し、吸収され続ける。

横から飛び掛かってきたスライムを見切り、バックステップで躲す。同時にジャンプの頂点を過ぎ、後は落下するだけとなったスライムを下から斬り上げる。それは落下する力と相まって、スライムを真っ二つにした。

7

「……あと一体」

もう一体いるスライムを正面に見据え、木刀を上段に構える。足は左を前に出してスライムを待ち構えた。間合いは3メートルほど。

十数秒、スライムと睨みあう。やがてスライムが焦れたのか、どこにあるかわからない発声器官から奇怪な声を出し、飛び付いてきた。

パンツ、と乾いた音が鳴る。それは右足が地面を叩く音だった。踏み込みと同時に振り下ろした木刀は、見事に剣先から物打にスライムを捉え、やはりこれも真っ二つにする。

「やっと終わった……」

そういつて安堵の息を吐いたのは、まだ年端のいかぬ少年だった。

——カチャカチャ、とナイフと皿が擦れ合う音が幾重にも重なって食堂に響く。その中で、器用にナイフとフォークを使い、上手く肉を小さく切り分けていた少年が口を開いた。

「母様、今日はグリーンスライムを28匹討伐しました。屋敷の近くに巣があるのやもしれません。明日にでも殲滅へ向かいたいのですが」

彼の母と思しき柔らかい雰囲気的女性が、咀嚼していた肉を嚥下すると頷いた。

「いいけど、あんまり危ないことばかりしていると、流石に心配よ、ネルヴァ。あなたまだ8才じゃない」

間延びした声で喋る母に目線を合わせて、少年は言った。

「母様、僕は下級モンスター程度に遅れを取る程、軟弱な鍛え方はしていませんよ」

安心させるような声音だった。

「そう、でも無理はしないのよ」

少年——ネルヴァは、ええ、と頷いた。

ある日、とある貴族の家に1人の男児が生まれた。

男児の父と母は、その男の子にネルヴァと名付けて可愛がった。

その家には既に2人の兄がいて、父は2人の兄に爵位と地位を分け与えるつもりであった。大体、貴族の家の三男坊とはそういったものは与えられない傾向にある。三男坊として生まれた者は、傭兵になったり、国に忠義を尽くし自力で貴族になるのだ。

それは、このビューレンス家も例外ではなかった。

ビューレンス家の三男として生まれたネルヴァは、その選択を幼い内にしなければならなかった。

その件に関して、特にネルヴァは悩まずに貴族になって成り上がるのではなく、傭兵として生きてゆくことに決めた。

理由は、貴族になると領地の管理が面倒なのと、もう1つ。

彼は、物心ついた頃から剣の腕が熟練の戦士のそれを遥かに凌駕していたのだ。

ビューレンス家の屋敷は、大きな森の近くに建っている。この森には様々な魔物——人間に害をなす獣の総称——が住んでおり、スライムなども一般的に魔物と呼ばれる。

そして、いまネルヴァは、そのスライムが巣としている洞窟の入り口に来ていた。

「……スライムくらい、軽く蹴散らせるようにならないと……。それにしても、やけに巣が大きいな。スライムはあんなに小さいのに」

呟いたネルヴァの疑問もつともである。スライム自体の大きさは20cm〜30cmであるはずなのに、この洞窟は穴の天井の高さがネルヴァの身長 of 2倍ほど、つまり2m以上の高さがある。

「動き易いし、大きいに越したことはないけど……」

用心深く、洞窟の奥へ進んでいくネルヴァ。時折飛び掛かってくるスライムを、魔力によって切れ味を増した木刀で切り払っていく。

そしてネルヴァが剣が帯びた薄紫の光を頼りに、入り口から20mほど進んだ時、洞窟の最奥と思われる広間に出た。

集団には、統治者が必要である。つまりグリーンスライムにも群れを統べる長がいるのだ。何が言いたいかというと……

「……グリーンスライム、大きい……」

ネルヴァより二回りほど大きなグリーンスライムが、広間の奥に佇んでいた。

く元魔王、探索く（後書き）

なんだか、場面転換が多いですね……

力量不足でしょうね（；^| ^A
頑張ります

く元魔王、苦戦く（前書き）

読んでいらっしやる方に精一杯の感謝を込めて、第3話です。

（元魔王、苦戦）

「はっ」

魔力を帯びた木刀で『キンググリーンスライム』を斬り付ける。もう何度も繰り返した行為だ。だが目の前の魔物は、微塵も傷ついた様子が無い。

「これはヤバいかも……」

横から跳んできたスライムを切り裂いて真っ二つにしながら、思わずそう呟く。

幸い、キンググリーンスライム自体は動く気配はない。それがただ動けないだけなのか、それとも余裕からくるものなのか、いまいちわからなかった。どっちにしろ、キンググリーンスライムの代わりにグリーンスライムが攻撃を仕掛けてくるので不利なことには変わりはない。

グリーンスライムは、キンググリーンスライムが生み出している。自分の体をちぎるようにして小さいスライムを造るのだ。

また、周りにグリーンスライムがないことを確認し、キンググリーンスライムへ斬り掛かる。だが、それは僅かに刃がキンググリーンスライムの体に食い込むに留まった。

「これはムリかなあ……」

キンググリーンスライムの体から木刀を抜き、容赦なく襲ってくるスライムを切り伏せながら呟く。

少し考えれば分かることだった。巣には群れを纏める長がいることくらい。そしてその長が、普通のグリーンスライムではないことも。

「一旦退却だな……」

ネルヴァは残りの魔力の総量から、これ以上の戦闘は不可能だと悟る。今の魔力の残量は最大の四分の1ほど。帰りの光源が足りなくなってしまうので、これ以上の消費は避けたい。

一旦外に出ようと、ネルヴァはキンググリーンスライムに背を向けて広間の出口に向かって走りだした。

——キンググリーンスライムが動かない（……）のではなく動けない（……）のだとしたら、逃げ切れるはず……

そんなネルヴァの希望的観測は、高く跳躍して広間の出口に、ぽすん、と着地したキンググリーンスライムによって裏切られた。

「え……」

——終わったー！！目論見ご破算呆気なー！！

ネルヴァは心の中で絶叫するが、だからといって状況が好転する

訳でもなかった。

キンググリーンスライムは心なしか今の状況を楽しんでいるようにも見える。

もう、にげられない。魔物は倒せない。敵の数は無尽蔵。完全に、詰み。

いや、キンググリーンスライムも倒せないというワケではない。だが、相当危険な賭けである。第一、この手段を使えば武器は失われ、残ったグリーンスライム達の餌食となることは確実。

いっそ徒手空拳で戦うか、という案が脳裏に浮かぶが、自分は剣以外の武術はからきしダメだという事実を思い出し却下。

「万事休す、か」

死の恐怖はある。だが、もうどうにもならないからと割り切って抵抗はしなかった。自分の浅はかさから招いたこの状況では喚こうとも思わなかった。全て自業自得。どうせ死ぬなら無様を晒したくはないな、とネルヴァは思った。

『ピー』

数匹のグリーンスライムが、奇声を挙げて体に飛び付いた。やがて吸収が始まる。動き易いから、という理由で着てきた綿の服は一瞬で分解された。鉄の鎧でも着てくれば少しは延命出来たのだろうか。栓ないことだな、と苦笑した。

気付かない内に、肉体の分解が始まっていたらしい。痛みはな

かった。痛覚を麻痺させる液体でも分泌させているのだろうか。

血なども吸収されているらしい。と、貧血により働かない脳で考える。

ネルヴァは、ぼんやりとしか働かない視覚でキンググリーンズライムを捉えた。相変わらず広間の出口を陣取っている魔物は、余裕な態度でネルヴァを見返していた。

その時広間が闇に閉ざされた。視覚が働かなくなったただけかと思ったが、どうやら違う。ああ、剣の光が消えたのか、とネルヴァは理解する。

もう本格的にネルヴァの思考はばらつき始めていた。走馬灯のように過去の映像が脳裏を流れる。でっぴりとした兄2人。悪人面のくせに優しかったな、と評価した。厳格な父。よくも木刀だけでスライムの巣窟に放り込んだな、と恨んだ。少し天然な母。先立つ不幸をお許し下さい、と許しを乞う。

そして、玉座に哀しげな顔で腰掛ける、謎の男。

その時、ほとんど働かない目の視界いっぱいに鮮烈な紅が広がった。

く元魔王、辛勝く

自分の体から火が迸っている。急に意識が鮮明になったネルヴァは、体にまわりついていていたグリーンスライムが消滅したのを見て、そう断定した。

それだけでも充分驚愕に値する出来事だが、さっきまで半分溶けていた自分の体を見て、さらに驚いた。

「治っている……」

爛れて、みるも無惨だった肌は、元のキメ細やかな白い女の子のような肌に戻っていた。

何より、魔力が全快、それどころか最大値の二倍程になっていることが彼を最も驚愕させた。

やがて体にまわりついていた炎は消え、ほぼ全裸のネルヴァが暗闇の中に姿を現した。

「これなら勝てる……!!」

ネルヴァはまた木刀に魔力を宿し、キンググリーンスライムに対峙する。キンググリーンスライムは、もはや手下を生み出そうとはしなかった。どうやら身1つで勝負にでるらしい。

それはネルヴァにとって好都合であった。周りに邪魔者がいないからこそ使える捨て身の技が、やっと使用可能になったのだ。

「ハアアアア……!!」

構えはなんでもいい。呪文も必要ない。木刀にありったけの魔力を込める。ただそれだけの力業。

ネルヴァのただならぬ気配を察したのか、キンググリーンスライムはやけ気味に襲い掛かってくる。

ただ飛び掛かるだけ、一直線な攻撃ほど避けやすいものはない。

キンググリーンスライムの攻撃を軽々と避けながら、ネルヴァは木刀に魔力を込めていく。

薄く紫に光っていた木刀は、今では強力な光源となり洞窟内を濃紫に染め上げる。

木刀に自身の魔力を八分の1ほど注ぎ込んだとき、ピキッ、と木刀が不吉な音を立てた。

込めた魔力に木刀が耐えられず、壊れ始めたらしい。

——そろそろかな。

ネルヴァは、これ以上魔力を込めるのは危険と判断し、輝く木刀に込める魔力を一定に維持させた。

そして、飛び掛かってきたキンググリーンスライムを避け、タイミングを見切り木刀を横薙に叩きつける。

魔力を最大限に込めた木刀は格段に鋭さを増していて、キンググ

リンスライムの体を易々と切り裂いた。

切り裂かれたキンググリーンスライムは、苦しげな断末魔の叫びを挙げながら消滅した。大量の魔力を流し込まれて、原型を維持出来なかったのかもしれない、とネルヴァは思った。

そして、木刀も粗い使い方をしたせいでバラバラに砕け散ってしまった。これで丸腰状態である。剣がないネルヴァはスライムにも負けてしまう。

ふと、キンググリーンスライムが消滅した地点に目をやると、暗い中、拳大の緑に輝く謎の石を見つけた。

それが何かは判らなかったが、綺麗だったので戦利品として拾っておいた。

さて帰ろう、と思い立ち、自分が全裸であることを思いだした。そこからどうやって帰ったかは思い出せなかった。きっと魔法でなんとかしたんだ、とネルヴァはそう納得した。

く元魔王、辛勝く（後書き）

ちよいと短めですぜい

……いつもか

く元魔王、鍛練く

ネルヴァは朝、使用人の呼び声で目が覚めた。だが、使用人の遠慮がちな声ではネルヴァの意識を完全に覚醒させることは出来なかったらしく、ネルヴァはしばらくベッドの上でぼんやりしていた。

それを見かねた使用人が、朝食の席で皆が待っている旨を伝えた。ネルヴァは煩わしそうに頭を掻いたが、結局ベッドを降りて、のそのそと着替えを始めた。

そしてふと、窓の外に目を向けると、外はまだ太陽が起きつつおらず、薄暗かった。

なんてこった、騙したな、と使用人に悪態をつきそうになったが、昨日自分が頼んだことを思い出し、開きかけた口を閉じた。

——明日からは、日が出る前に起こしてくれ。

昨日、使用人の1人にそう頼んだのだ。

先日のキンググリーンスライム討伐は、辛うじて勝ったものの殆ど失敗したようなものだった。そして、ネルヴァは自身の能力を省みてこのままではダメだ、と判断した。ネルヴァは剣の技能は天才的だが、その技術に筋力が伴っていないのだ。

「取り敢えず、素振りかなあ……」

服を動きやすい物に替え、木刀を探したが見当たらない。そし

て思い出した、木刀は昨日の酷使で粉々になってしまったのだ。

木刀が無くても素振りは出来る。仕方なく、庭に生えている木の、枝を失敬しようと考えた。素振りを終えたら朝食を摂り、その後スライムを討伐しに行こうと思ったが、まさか木の枝で戦う訳にもいくまい。朝食の席で、父親に新しい木刀をくれるように掛け合ってみようと、ネルヴァは画策する。

起こしに来てくれた使用人に礼を言い、部屋を出て玄関へ向かった。

そして、ネルヴァが玄関のドアのノブを掴んだ時、後ろに人の気配があることに気付いた。

「ネルヴァ」

背後の人影に声を掛けられた。ネルヴァはこの声を知っている。何時も寡黙で、あまり話したことがない実の父親、クラウドセン・ビューレンスの声だった。

「何ですか、父様」

振り返り、ネルヴァは応える。

「何をしに外へ出る気だ」

クラウドセンは、威厳のある声で問う。

「庭へ素振りをしに行きたいと思ひまして」

すると、クラウドセンはしたり顔になって、言った。

「素振りをしに、か。木刀を持っていないようだが、どうしたんだ」

「木刀、壊れてしまったんです。先日、グリーンスライムの巣で粉々に」

ネルヴァは苦々しげに言った。

「そうか。それでお前は木刀を持っていないのに、どうやって素振りをするんだ？」

「庭の木を少し失敬しようかと」

「やめておけ。またお前の母親が痼癪を起こすぞ。何故あそこまで庭の造形に執着するのか理解に苦しむが……とにかく、木刀が無いのならついて来い。武器庫へ連れて行ってやる」

そう促したクラウドセンは、長い廊下の奥に向かって歩きだした。ネルヴァも慌てて後を追った。

ここだ、という言葉とともに、武器庫の扉がクラウドセンの手によって開かれた。

「これは……」

ネルヴァは、思わず感嘆の声を漏らした。

武器庫の中は、剣、剣、剣、見渡す限り剣だらけだった。それだけでも驚くべきことだが、この奥には槍等が納めてある武器庫もあるという。

「こ、これ、好きに選んでいいんですか」

震える声でネルヴァは問う。

「ああ」

そう応えたクラウドセンの顔は、心なしか得意げに見えた。

それじゃあ、と何故か揉み手をしながら自分の身長に合った剣を探し始める。

——取り敢えず、必要なのは頑丈さと、ある程度の重さ、あとは魔力伝導率かな

ネルヴァはそんなことを考えながら、鋼鉄の剣を物色していく。どの剣も似たり寄ったりだが、魔力を流してみれば全然別物だと判る。魔力の流れやすさ、それが魔力伝導率である。

その中で、かなり異質な存在感を放っている剣がネルヴァの目に止まった。

「巨大な、出刃包丁……?」

全長は、柄を合わせて90cmほど、鍔が無く、刃が柄より前

にせり出している。まさに、
巨大な出刃包丁としか形容出来ない剣
だった。

く元魔王、鍛練く（後書き）

お気に入り登録してくれた方、本当にありがとうございます。このような拙作を評価して頂けて、感謝感激雨あられであります。これからもよろしくお願いします。

く元魔王、遭遇く

無数の剣が並ぶ武器庫でも、その剣は一際異彩を放っていた。シンプルな造りのはずなのに、その漆黒の出刃包丁には圧倒的な存在感があつたのだ。

剣先から柄頭まで90cmほどと、現在8才のネルヴァには少し大きい。大振りな大剣だと思えば充分振れそうである。

ネルヴァはその剣を手にとってみた。鉄特有の無骨な重さが掌に伝わる。重量はネルヴァにとって丁度よかった。

そして、ネルヴァは魔力を剣に流してみる。体から僅かに何かが抜けてゆく感覚。だがそれは不快なものではなく、ネルヴァにとっては極自然なものだった。

「すごい……魔力伝導率が木刀の比じゃないな。他の剣とも一線を画している」

それからはあまり悩まなかった。いくつか目についた剣をみて、結局出刃包丁にしたのだ。やはり魔力伝導率の高さが決め手だった。

ネルヴァは、現在ビューレンス家の屋敷、その近くにある小さな草原にきている。あの後、武器庫で漆黒の出刃包丁と見つめ合っていたところ、屋敷の使用人に保護されて、朝食を摂らされた。そ

して、朝食を食べ終えて、腹ごなしと出刃包丁の試し切りを兼ねたスライム狩りに行こうと思いい立ち、今に至る。

何時もならここで延々と一人でスライムを殺戮しているのだが、今日は違う。

——イレギュラーの正体は、スライムを狩り続けるネルヴァの近くにちよこん、と腰を下ろしている7、8才くらいの少女。腰まで伸びたコバルトブルーの髪が陽光をキラキラと反射させ、少し神秘的な雰囲気を作り出しているが、顔に張り付いた眠そうな表情が雰囲気をぶち壊していた。

時々女の子を襲おうとするスライムを切り裂いて、いつからそこにいたのかと記憶を模索するも、これっぽっちも気配を感じたという記憶がなかった。

つまり、気付いたらそこにいた、ということである。

ネルヴァは適当にスライムを切り払いつつ、少女にここにいたら危ないという旨を伝えるため、コンタクトを謀る。

「あの、ここにいますスライムが襲ってきて危ないですよ」

「ねえ、あなた魔法は使わないの？」

ファーストコンタクト、失敗。会話が成り立たなかった。

ネルヴァは泣きそうになりながらも、必死にスライムを狩り続ける。同じくらい必死に、少女との会話を繋げようとする。

「魔法……魔法ですかあ。そういえば、今まで簡単な魔力操作くらいしかしたことありませんでしたね。近いうちに試してみようかなあ。それはそうと、ここはスライムが沢山いるので危険ですよ」

ネルヴァの必死の勧告に少女は、平気よ、と呟いておもむろに立ち上がる。何が平気なのか、と訝しむネルヴァをよそに、少女は自身に這い寄るスライムに掌を向けて、何事かを一言唱えた。すると、

『ふきー』

断末魔の叫びを残して、スライムは少女の掌から飛び出した火に焼かれ溶けた。

「は……?」

ネルヴァは、口をポカンと開け呆然となる。その間も飛び掛かるスライムを、剣ですばずば切り裂いているのは、もはや無意識でやっていることなのだろう。

「魔法、教えてあげる」

少女はおもむろにそんなことを呟いて、また草原に座り込んだ。まるで、スライムから私を守りなさい、とでも言うように。

仕方なく、ネルヴァは周囲のスライムの掃討を始める。今まで、自分と少女の周囲のみだったが、剣の及ぶ範囲を広げてこの小さな草原の全域にいるスライムを狩るために、あっちへこっちへ駆

けずり回る。

そして、草原内の全てのスライムを狩り終わると少女に向き直った。

「魔法を、本当に教えてくれるんですか」

ネルヴァは少女に問う。ネルヴァにとって、魔法はかなり魅力的であった。将来、戦闘系の職業に就く場合には魔法というスキルはあって困るものではないだろう。覚えていれば、傭兵という職業に於いて必ず大きなアドバンテージになる、さっきの少女の出した火を見てそう確信した。

そのネルヴァの問いに対し少女は、依然として眠そうな顔で、だが確かに頷いた。

く元魔王、遭遇く（後書き）

同じようなタイトルの作品があるみたいなので、小説のタイトルを変えました。

やっとヒロイン登場です。容姿、性格は完全に作者の趣味ですよ。

（元魔王、修得）

「『――』」

ネルヴァは魔法を唱える。前方に突き出したネルヴァの掌から、弱々しい火が放射される。火はネルヴァの掌から離れ独立するが、30cmほど前に進むと、フツと掻き消えた。

「……違う、こうやる」

ネルヴァの隣に立つ少女が、先ほどネルヴァが唱えた呪文と同じ言葉を口にすると、前方に構えた少女の掌から、ネルヴァとは比較にならない程力強い炎球が飛び出した。

「む、無理かもしれない」

ネルヴァはポツリと呟く。辺りのスライムを一掃したところで、少女に魔法を教えてくれるように頼んだのだが、教えてもらったところで軽々扱えるものでは無い。

「『――』」

もう一度ネルヴァは火球の呪文を唱えた。だが、やはりネルヴァの掌から出たのは、弱々しい火だった。自分の魔法と少女の魔法が同じ物だとはとても思えない。

もう魔法の練習を始めてから数時間が経過しているが、無駄に魔力を消耗するだけで一向に魔法の技能が伸びる様子はなかった。

——もう、諦めよう。

ネルヴァが、そう口にしようとした時、

「……媒体があれば」

隣で少女が呟いた。ネルヴァが「はい？」と聞き返すと、少女はおもむろにネルヴァの持つ出刃包丁を指差した。

ネルヴァは少女の言動から意図を汲み取り、剣を魔法発動の際の媒体にしようと言いたいのだと理解する。

一般的に魔法とは、体から体外に出る魔力によってできている。魔力が体から出る際に、呪文等によって魔力に属性（火や雷など）を付加し、そこで初めて魔法と呼ばれるものになる。つまり、呪文が無ければただ魔力を外に放出するだけの攻撃になってしまう。ネルヴァは、属性付加の段階でつまづいているのだ。

「この剣を使って魔法を発動させるんですか……」

剣を中継して、体外に魔力を放出する。剣や杖などは、魔力に体の延長と捉えられ属性付加出来る時間が僅かに増えるとか、なんとか。

よく分からないが、取り敢えず剣を上段から振り下ろしながら火球の呪文を唱えた。振り下ろす必要はなかったかもしれないが、何となく魔法に勢いがつくかも、とか思いついてみた。結果、

何故か剣は炎を帯びて、さらにそれを勢いよく振り下ろしたお

かげで炎は剣を離れ、三日月状の火球（？）となり前方に飛んでいった。

威力は、少女の火球を遥かに凌駕している。やがて三日月の火はネルヴァから20mほど離れた所でフツ、と消えた。

「……凄い」

ネルヴァの隣にいる少女が、呟いた。

正直、少女の驚愕とは裏腹に、ネルヴァはあまり驚かなかった。魔法は杖で発動させるものだと思っていたので、剣で発動させられる、と言われた時の方が驚いた程だ。まあ、球の型ででる炎が三日月型だったのはそれなりに驚いたが。

剣でやれば、出来るのは何となくわかった。その位、ネルヴァは剣に関しては天才的なのだ。

だが、魔法という攻撃手段を手に入れられたのは、素直に喜ばしいことだった。

少女は、驚愕から立ち直ったようで、

「……どう？」

と訊いてきた。イマイチ要領を得ないが、魔法の感想ということだろうとネルヴァは解釈し、答える。

「何というか……疲れました」

「そう」

.....。

.....。

会話が保たない雰囲気、若干の気まずさを感じたネルヴァは、話題を模索した。そして、重要なことを思い付く。

——この女の子の名前は……？

数時間、この少女と共にいたのに名前すら知らなかった。そのことに、少女に対して若干の罪悪感を感じるが、まあ向こうも訊いてこなかったしいいか、と思い直す。

取り敢えず名前だけでも名乗っておこう、とネルヴァは考え、言った。

「そういえば、まだ名乗っていませんでしたね。僕はネルヴァ・ビューレンスです」

ネルヴァが言うと、少女は僅かに目を見開く。

——一体、どうしたのだろうか？

わなわなと震わせていた唇を開き、少女は答えた。

「……私は、フィリア……です。名字は……ありません。……平民です。……先ほどの無礼、どうかお許してください」

平民？物腰は貴族の様な振る舞いなのに、この子は平民なのだろうか。何かそこら辺は込み入った事情がありそうなので、触れないでおこうとネルヴァは思った。

「別に、いいですよ。いや、僕、貴族の三男ですからそこまで怯えなくても……」

少女の態度に、少し心に傷を負う。でも仕方ない、とネルヴァは思った。

貴族にとっては、平民の人権など無いに等しいのだ。それこそ、反抗したり態度が悪かったりするだけで首が飛ぶこともある。数十年前は、貴族でない者は人ではないとまで言い切った者もいた。それほど、貴族と平民の身分差は大きいのだ。

少女は、気にしていないと言われて安堵したようだった。

——それにしても、僕はそんなに貴族に見えないのかなあ……

ネルヴァは心の中で落ち込んだ。

——日は、もうすぐ暮れそうだった。

く元魔王、修得く（後書き）

……なんか貴族とかよく分からなかったので、かなり鬼畜になってしまった……

でも後悔はしていません。

く元魔王、読書く（前書き）

お気に入り登録、ありがとうございます。これからも頑張ります。

〔元魔王、読書〕

ネルヴァは、この日雨が降っているためスライムを狩りに行かず、家で読者に勤しんでいた。本のタイトルは『魔物大全』。正直8才児が読める内容ではないのだが、もともとネルヴァは頭が良かったため十分読める。

いま開いているページは、スライム関連。この前の戦闘で、情報の大切さを知ったネルヴァは、こうしてスライムの生態を事細かに調べているのだ。

パタン、と本を閉じて昨日の事を思い出す。結局、昨日は暗くなってきたということで名前を名乗るだけで別れた。コバルトブルーの髪を持つ少女、フィリア。何故かネルヴァは彼女のことが気掛かりだった。

頭を振り、フィリアを脳内から追い払う。どうもさつきから彼女の事ばかり考えてしまう。

もう一度『魔物大全』を開きスライムの生態を確認する。ネルヴァは、キンググリーンスライムともう一度戦いたかった。そのためにはまず巣を見つけなければならない。巣を見つける手掛かりがスライムの生態に書いてあるかもしれない、そう思い、本を食い入るように見つめる。

「……グリーンスライムは、主に巣の外で狩りを行う。餌を捕まえると、強力な消化液で分解、吸収する。その際、餌の抵抗をなくすため特別な液を分泌し痛覚を鈍くし、消化を助ける。餌を吸収し

たグリーンスライムは、巢に戻りキンググリーンスライムと同化し、キンググリーンスライムの栄養となる」

なるほど、栄養を吸収したグリーンスライムを追えば、キンググリーンスライムへとたどり着けるということか、とネルヴァは納得する。小動物でも餌にしてそれを吸収したグリーンスライムを追おう。

魔力量が増え、剣が鉄製になり、魔法が使えるようになったネルヴァは、この辺り一帯の魔物には負けない自信がある。出没する魔物が変わる夜は別だが。

この世界では、昼と夜に活動する魔物が異なる。昼は基本的に下級〜中級の下位程度。夜になると中級〜上級の強さの魔物が活動する。更にこの上に最上級という魔物が存在しているが、これは滅多に姿を現さない。格付けの基準は、下級ならば素人でも倒せるレベル、中級は熟練の傭兵が数人集まって倒せるレベル、上級は熟練の傭兵が数百人集まって倒せるレベル、最上級は一国の戦力を総動員してやっと倒せるレベルである。

キンググリーンスライムは中級にカテゴライズされるが、中級の中でも下位に位置付けられるためネルヴァでも倒せる。

『魔物大全』をネルヴァが読んでいると、ふとある記述が目にとまった。

『中級以上の魔物は、魔石という石が体の中にあり、ひとつひとつがそれなりの魔力を有しているため高値で売れる』

……魔石とは、あのキンググリーンスライムを倒した後にできた石のことだろうか。まあ集めて損はないようだ。

また本を閉じて、暫く黙考する。いま欲しいのは雷系統の魔法。雷ならば、直撃せずとも擦るだけで相手を感じ電させられる。それに魔力を込めれば、一撃で感電死を狙えるかもしれない。

きっと呪文を知っていればネルヴァには剣の一振りで使える魔法だ。

だが呪文などネルヴァは知らない。

呪文を記してある本を探しにネルヴァが書庫へ向かうのは当然のことだった。

書庫の扉を開け中に入る。後ろ手に扉を閉め書庫の内部を見渡した。

大きさは武器庫とさほど変わらない。だが、こちらは本特有のインクの匂いがして、ネルヴァは僅かな便意を催した。

ネルヴァはここで呪文が記してある書物を探す序でに、左手に持った『魔物大全』を置きに来た。

『魔物大全』を4つの大きな本棚の1つ、その空いたスペースに適当に仕舞い、目的の書物を探し始める。しかし背表紙にタイトルが書いていない本が本棚の大半を占めていて、一々本を引っ張りだしてタイトルを確認しなければならなかったため、作業は難航を極めた。

3時間ほど本を探し続けて、漸く目当ての書物を見付けた。本のタイトルは、『下級雷魔法大全』。ちなみに、これを見付けるまでに『中級雷魔法大全』、『上級雷魔法大全』も見付けたため、思わぬ豊作となった。

ネルヴァは書庫を後にして自室へ戻る。椅子に座り『下級雷魔法大全』を開く。上級と中級は、まだネルヴァの魔力量ではとても使えないため、ベッドの下に収納スペースに仕舞った。『下級雷魔法大全』は思ったより内容が濃く、ネルヴァは夢中になって読んだ。

そのため、読み終える頃にはすっかり夜が更けていた。

く元魔王、読書く（後書き）

まだ幼年編なので主人公は最強ではありません。

成長すれば主人公は無双します。

（元魔王、再戦）

その日の朝は使用人に起こしてもらった。ネルヴァは覚醒し切らない頭をボリボリと掻き、ベッドから降りて着替えを始める。寝間着から動きやすい服に着替え終わる頃にはすっかり頭も覚醒していた。

鉄製の“出刃包丁”を片手に庭へ向かう。目的は素振り。結局早朝から素振りをするのはこれが初めてだったりする。

庭に立ち、剣を両手で持って正眼に構える。そしてゆっくりと剣を振り上げ、ゆっくりと振り下ろす。流石に鉄の塊である剣を思い切り振り下ろし、それを地面に付けずに止めるのは、8才であるネルヴァには不可能だった。

振り上げ、振り下ろす。この動作以外は全くしない。もともと素振りの目的が筋力アップなので、鉄の塊が振ればいいのだ。

恐らく、これ以上剣の技能は上がらない、確実にだ。ネルヴァは齢8にして剣の極みへと至ったのだ。

そのまま3分ほど振り続ける。3分も振ればネルヴァはクタクタだった。

——回数のノルマを設定して振った方が効率的かもしれない……

回数のノルマを達成したら、小休止をいれて再開する。それを

繰り返している内に日は出てきて、朝食の時間となる。

汗を拭い、顔を洗い貴族らしい服に着替える。といっても朝食を食べた後はスライムのいる草原へ向かうつもりのため、また動きやすい服に着替えることになるのだが。

食堂の扉を開けるとまず見えるのは、壁際にズラリと並んだ使用人達。次にバカデカイ机の最奥に座っている父、その隣に座る母（兄2人は学園とやらにいる）。ネルヴァは父母の近くにある自分の席に着き2人に「おはようございます」と声を掛けた。返答はない。食事中は喋らないのがマナーである。ネルヴァも分かっている声を掛けたのだ。

ネルヴァはフォークを持ち、自分の前にある料理に手を付けた。それを口に運びゆっくりと咀嚼する。別に味わっている訳ではなく、消化を早くする為だ。

自分の前に並べられた料理の半分を食べ終え、ネルヴァは席を立つ。そしてまだ朝食を食べている父と母に「行ってきます」と告げ、食堂から出る。自分の部屋へ戻り、動きやすい服にもう一度着替えた。

部屋の入り口近くに立て掛けてある出刃包丁を手に取り、家を出た。

グリーンスライムというのは、基本的に肉食である。それこそ、どんな肉でも食べる。だが、何故かスライムは他のどんな肉よりも

人の肉を好むのだ。

勿論、ネルヴァは自分が餌になろうだなんて思わないし、自分以外の人間を餌にしようとも思わない。なのでそこは小動物で代用することにした。途中で捕まえた兎を草原のど真ん中へ投げ込み、様子を見る。その際に、草原にフィリアがいないか探してしまうのは何故だろうか。

草原のど真ん中に投げ込まれた兎は、逃げようとするも運悪くグリーンスライムに捕まってしまう。そして更に幾匹かのスライムも兎に飛び掛かり、兎はあっという間に骨ごと消化吸収された。

それを特に感慨もなくネルヴァが見つめていたのは、殺生に慣れてしまったからだろうか。

吸収を終えたグリーンスライム達は、他に餌はいないかと辺りを捜し回るような動作をするが、すぐに何もいないことを悟ると慌ただしく草原を散り散りに去った。ネルヴァはその中の一匹に狙いをつけて尾行を始める。

スライムは帰巢本能がわりと強いらしい。確固たる足取り（もとい粘液取り）で自分の巣と思わしき場所へ向かっていく。そしてスライムを追い続けて辿り着いた所は——奇しくも、最初にネルヴァが戦ったキンググリーンスライムのいた洞窟だった。

そんなことは関係ないとばかりに、ネルヴァは洞窟に入る。グリーンスライムが何度も飛び掛かってくるが、魔力を帯びた剣で全て切り払う。ネルヴァは臆することなく、どんどん進んで行く。

魔力を剣に流さなくても、自前の切れ味でスライムくらい十分切れるのだが、剣は魔力を帯びると切れ味が低下しにくくなり、更に洞窟などでは光源になるため、ネルヴァは魔力を帯びた剣で戦っているのだ。

そして辿り着く。最奥の広間。

キンググリーンスライムは、広間の真ん中に佇んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9297x/>

優男、所により魔王

2011年11月17日18時31分発行